

青年期の若さにおける捉え方及び自己認知について

—アイデンティティ形成のための自己投入及び自尊感情との関連から—

姜 信善・若林 杏菜*

How people who are in adolescence perceive and self-recognition youth
—Relationship between self-injection and self-esteem for figuration of identity—

Sinsun KANG, Anna WAKABAYASHI

キーワード：若さ，青年期，アイデンティティ，自己認知，自尊感情

keywords：Youth, Adolescence, Identity, Self-recognition, Self-esteem

問題及び目的

「若さ」とはどのようなものを指すのだろうか。若いとは「生まれてからまだ多くの年月を経していない・元気で活力にあふれている・未熟だ」(大辞林第三版,2006)ということであり，若さとは，年齢という外的側面と，活力があることや未熟さなど，内的側面から考えられるだろう。年齢で見ると，若者とは青年期にある14歳～25歳まで(健康日本21)の若い男女のことであるが，若さを内的側面から見た場合，年齢や身体的若さの制限がなくなり，老人でも今を生き生きと暮らしている場合には若いという印象を受ける。以上より，若いとは，年齢としては青年のことを指すが，内的側面からみる場合には，青年に限らないといえるだろう。人が充実した今を過ごすためには，若さを内的側面からポジティブに捉えることがより重要だと考えられる。

近年，働かない・学ばない青年はニートと呼ばれ，2014年の若年無業者(非労働力人口のうち家事も通学もしていない者)は22万人(子供・若者白書，27年版)に上るなど社会問題になっている。求職活動をしていない・就業を希望しない理由として，病気やけがを除くと，知識・能力に自信がない，急いで仕事につく必要がない，特に理由はないなどが挙げられ，その背景に意欲の低下や自信のなさ等が考えられる。内閣府は2013年に，日本・韓国・アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・スウェーデンの7か国の13～29歳の男女を対象にインターネットを通して実施し，各国約1,000人程度から回答を

得た調査の結果から次のように報告している。まず，「自分自身に満足している」と回答(「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」の合計，以下同じ)したのは，アメリカ86.0%，イギリス83.1%，フランス82.7%，ドイツ80.9%，スウェーデン74.4%，韓国71.5%であったのに対して，日本は45.8%と半数にも達していない。また「自分には長所がある」と回答したのはアメリカ93.1%，ドイツ92.3%，フランス91.4%，イギリス89.6%，韓国75.0%，スウェーデン73.5%に対して，日本の若者は68.9%とやはり最低であった。さらに，「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」というのは，フランス86.1%，ドイツ80.5%，イギリス80.1%，アメリカ79.3%，韓国71.2%，スウェーデン66.0%に対して，日本は52.2%となっている。他の国の若者に比べて日本の若者は自己肯定感が低く，自分に長所があると感じる割合も低いことが示唆された。日本においてこの自己肯定感の低さが，若者の求職活動を含めた積極的社会参加の阻害要因の1つとして推察される。このような自己肯定感の低い青年の自己形成のプロセスはどのようなになっているのであろうか。

自己投入とは自我同一性形成のプロセスで生じるものであり，自我定義を実現し，自己を確認するための独自の目標や対象への努力の傾注のことである(加藤，1983)が，荒井(2005)は，現在の自己投入と自尊感情には中程度の相関があり，自尊感情が低下した状態では，自己投入という心の動きが生じにくいと述べている。また高井(2007)では，自尊感情の低い人は失敗を懸念する気持ちが強く，自己を自律的に，意欲的に生きる生き方態度にも負の影響

*富山大学人間発達科学部 平成27年度卒業

響を及ぼしている」と報告されている。このことから、ニートと呼ばれる青年は、自尊感情が低下しているために自分に自信を持てず、意欲的に学んだり働いたりすることができていないと思われるが、自尊感情の低下には若さに対する自己認知が影響しているのではないだろうか。たとえば、自分は若くないという自己概念を持っている青年は多くの場合、自分は若くて元気なはずであるのに、現在の自分には活力がないと捉えていることが予想される。つまり青年が自分を若くなく、活力がないと認知した場合、若さにおける理想自己と現実自己のズレが生じ、それが自尊感情に影響を及ぼし、ニートなどの社会問題にもつながりやすくなるのではないだろうか。また大野(2010)は、役割実験とはアルバイト、サークル活動、ボランティア活動など、さまざまな場におけるさまざまな自分を体験し、自分らしい自分とは何かを探っていくことであるとし、アイデンティティ形成のための役割実験がうまくいかない場合は、失敗にとらわれず次に挑戦することが大切であると指摘すると同時に、青年期の役割実験だからこそ、それが許されると述べている。つまり青年が若さとは失敗が許されるものだとして捉えていれば、自分を若いと認知することは、失敗を恐れず、何事にも積極的に行動することにつながるのではないだろうか。これらのことから、若さにおける自己認知や若さそのものについての捉え方により、アイデンティティ形成に向けての自己投入は異なってくることが予想される。また井上(2008)は、高自尊感情者は自己概念が時間的に安定しており、低自尊感情者は自分が誰なのか、何であるのかについてはっきりしていないと述べ、自尊感情とアイデンティティとの関連を指摘している。以上より、若さについての自己認知は自尊感情やアイデンティティの形成に影響を及ぼすことが予想される。ところが、これまでアイデンティティ形成において若さに注目した検討はほとんど見当たらない。

そこで本研究では、「若さのポジティブな捉え方及び若いという自己認知はアイデンティティに向けての自己形成及び自尊感情に正の影響を及ぼすであろう」という仮説のもと、青年期における若さの捉え方や若さについての自己認知が、自尊感情及びアイデンティティ形成に向けての自己投入にどのように関連しているのかについて調べることを目的とする。それにより青年期における円滑なアイデンティティ

形成のための何らかの示唆を得ることができると考えられる。

I. 若さの捉え方と自己投入及び自尊感情との関連について(研究1)

目的

若さの捉え方とアイデンティティおよび自尊感情との関連について検討していくことにおいて、まず若さの捉え方についての尺度作成を行い、それを用いてアイデンティティの形成に向けての自己投入および自尊感情との関連について検討することを目的とする。

1. 若さの捉え方に関する尺度の作成(研究1-1)

(1) 予備調査

目的

ここでは青年が若さについてどのように捉えているのかについて調べ、若さの捉え方に関する尺度作成における示唆を得ることを目的とする。

方法

【対象者】：T県の大学生計282名

【調査時期】：2015年5月

【調査内容】：若さとはどういうものだと思いますかという質問に対し、自由記述による回答が求められた。

結果

①項目内容の収集

若さの捉え方について得られた回答内容を、以下の6つのカテゴリーに分類することができた。

1つ目のカテゴリーは“自分の限界に果敢に挑むこと”、“自分の目標や夢に向かって努力すること”など、何かに挑戦する力またはそれへの積極性を示す内容が含まれている『挑戦力』である。2つ目のカテゴリーは“新しいものを取り入れる”“好奇心”などの新奇なものへの興味関心を示す内容が含まれている『柔軟性』である。3つ目のカテゴリーは“人生への希望”“将来の選択肢が多い”など、若いからこそ将来のことが期待できるという内容を含む『将来性』である。4つ目のカテゴリーは“失敗が許される”“後先考えず冒険する”など、若さを失敗や冒険が周りから受容され、それが若いからこそできるという内容が含まれる若さの『特権』である。5つ目のカテゴリーは“自分本位”“常識に乏しい”などの内容が含まれ、若さそのものについて否定的な

立場で捉えている『若さ卑下』である。6つ目のカテゴリーは“成長できる時期”“将来を決断する時期”など、若さを時期という観点から捉えている内容の『時期限定』である。

②測定項目の作成・検討

回答から得られた内容により作成された項目に対して、再検討や修正を行い、研究の目的に合わせて項目の作成を行った。最終的に36項目が若さの捉え方の項目と選定された。

(2) 若さの捉え方に関する尺度作成

目的

予備調査により作成された測定項目を基に若さの捉え方の内容及び構造を調べ、若さの捉え方に関する尺度を作成していくことを目的とする。

方法

【対象者】：T 県の大学生計420名（男194名，女226名）

【調査時期】：2015年11月中旬～下旬

【調査内容】：予備調査で収集された若さの捉え方

に関する質問項目，全36項目について，それぞれ「当てはまらない」「やや当てはまらない」「どちらともいえない」「やや当てはまる」「当てはまる」の1～5点の5件法で回答が求められた。

結果及び考察

予備調査の結果を基に，若さの捉え方に関して作成された全36項目の回答について，因子分析を行った。

複数の因子に負荷量を示していたり，負荷量が低い項目を削除したりし，繰り返し因子分析を行い，5因子を仮定することができた。12項目を削除し，全22項目となった。プロマックス回転後の因子パターンは Table1-1 に示す。

第1因子は“自分の限界に果敢に取り組む勇気”“様々なことに挑戦する意思”“なんでも興味を持つ好奇心”などの項目から構成された。この因子には，若さとは自分の限界に挑戦したり，様々なことに取り組んだりする意思や行動として捉えている内容が含まれている。そこで，第1因子は「推進力」因子

Table 1-1 若さの捉え方に関する項目の因子分析（プロマックス回転後）

No	項目内容	F1	F2	F3	F4	F5	共通性
F1 「推進力」							
17	自分の限界に果敢に挑む勇気	.922	-.192	-.208	.124	.107	.677
18	新しいものを取り入れる勇気	.844	.037	-.119	.006	-.060	.593
22	どんなことにも取り組む積極性	.688	.047	.026	-.093	.003	.468
12	様々なことに挑戦する意思	.624	-.091	.216	-.025	-.045	.555
27	自分の目標のために努力するひたむきさ	.615	-.033	.197	-.033	.041	.515
31	好きな物事に熱中する一途さ	.554	.107	.074	.035	-.033	.451
36	なんでも興味を持つ好奇心	.452	.160	.254	-.056	-.031	.477
F2 「若さ卑下」							
15	自分本位な考え方であること	.054	.756	-.129	.087	-.095	.380
25	一般常識に乏しいこと	-.112	.687	-.029	-.019	-.017	.562
10	無計画で無秩序なこと	-.003	.602	-.091	.012	.258	.570
35	根拠のない自信を持つこと	.054	.540	.059	.017	.111	.454
20	感情の変化が激しいなどの不安定さ	-.034	.515	.111	-.004	.020	.303
F3 「成長の基礎」							
11	いろいろなことを学んで成長できる時期	-.067	-.048	.670	.059	-.015	.407
6	様々なことに挑戦できる時期	-.111	-.210	.590	.112	.202	.371
3	これからの人生への希望	-.008	.020	.590	-.075	.143	.402
2	様々な知識や考え方を習得できる力	.079	.142	.582	-.008	-.211	.380
23	知らないことや新しいことを吸収して成長する力	.261	.018	.473	.003	-.013	.462
8	今後の自分を努力次第でいくらでも変えられる可能性	.171	.004	.433	.000	.006	.321
F4 「大過許容」							
19	失敗が許されること	-.012	.031	-.061	.823	-.090	.596
34	間違いや失敗ができること	-.042	.048	.149	.792	-.097	.694
32	失敗してもやり直しができること	.048	-.008	.050	.650	.062	.383
14	多少の無茶が通ること	.052	.081	-.028	.412	.217	.531
F5 「無分別挑戦」							
4	後先考えず冒険する無謀さ	-.030	.075	.047	-.084	.835	.716
9	何でもできるような気がしてとりあえず行動する無鉄砲さ	.067	.169	.046	.040	.582	.586
因子間相関							
	F1	—					
	F2	.488	—				
	F3	.665	.314	—			
	F4	.528	.569	.469	—		
	F5	.397	.561	.323	.455	—	

	α 係数	.877	.785	.774	.807	.768	

と命名された。第2因子は、“自分本位な考え方であること”“一般常識に乏しいこと”“無計画で無秩序なこと”などの項目から構成された。この因子は、若さとは完成されたものではなく、劣っているものであると捉えている内容が含まれている。そこで第2因子は「若さ卑下」因子と命名された。第3因子は“いろいろなことを学んで成長できる時期”“様々なことに挑戦できる時期”“様々な知識や考え方を習得できる力”などの項目から構成された。この因子には、若さとは成長するための根底となるものであるという内容が含まれている。そこで、第3因子は「成長の基礎」因子と命名された。第4因子は“失敗が許されること”“失敗してもやり直しができること”“多少の無茶が通ること”などの項目から構成された。この因子には、若さとは失敗するものであり、多少は失敗しても良いという内容が含まれている。そこで、第4因子は「大過許容」因子と命名された。第5因子は“後先考えず冒険する無謀さ”“何でもできるような気がしてとりあえず行動する無鉄砲さ”の項目から構成された。この因子には、若さとは結果を考えずにとりあえず何でもやってみるものだという内容が含まれる。そこで、第5因子は「無分別挑戦」因子と命名された。

因子仮定後に Cronbach の α 係数を算出したところ、第1因子、第2因子、第3因子、第4因子、

第5因子それぞれにおいて順に、0.88, 0.79, 0.77, 0.81, 0.77であった。

2. 若さの捉え方とアイデンティティおよび自尊感情との関連についての検討（研究1-2）

目的

先述の通り他の国の若者に比べて日本の若者は自己肯定感が低いことが内閣府（2014）などの報告により示されている。そこで本研究では若者のこのような自己概念の形成、特に自尊感情には、自分の若さをどのように捉えているかが何らかの影響を与えていることが考えられ、若さの捉え方を取り上げて調べることにする。またそのような若さの捉え方はアイデンティティ形成に向けての自己投入にも関連があることが予想され、これについて検討していく。

自己投入に関して加藤（1983）は Marcia（1966, 1980）の同一性地位尺度について次のように指摘している。Marcia は危機と自己投入の2変数によって各同一性地位を定義している。しかし同一性達成地位と権威受容地位とは過去の危機の有無によって判別されるのに対し、積極的モラトリアム地位は、明確な自己投入の対象を求めて現在危機の最中にいる、というように、危機には過去のそれと現在のその2つが含まれている。また、積極的モラトリアム地位を特徴づける現在の危機は、将来への展望

Table 1-2 同一性地位判定尺度¹

[現在の自己投入]	
1	私は今、自分の目標を成し遂げるために努力している。
*2	私には、特にうちこむものはない。
3	私は、自分がどんな人間で何を望み何を行なおうとしているのか知っている。
*4	私は、「こんなことがしたい」という確かなイメージを持っていない。
[過去の危機]	
*5	私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことはない。
6	私は自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということがかつて真剣に迷い考えたことがある。
*7	私は、親や回りの人の期待に沿った生き方をすることに疑問を感じたことはない。
8	私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある。
[将来の自己投入の希求]	
9	私は、一生懸命に打ち込めるものを積極的に探し求めている。
*10	私は、環境に応じて、何をすることになっても特に構わない。
11	私は自分がどう人間であり、何をしようとしているのかを、いまいくつかの可能な選択と比べながら真剣に考えている。
*12	私には、自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない。

*は逆転項目であることを示す。

¹加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造、教育心理学研究, 31, 292-302

を伴ったものであることが必要であるとし、「現在の自己投入」の水準、「過去の危機」の水準、「将来の自己投入の希求」の水準の3つの変数を測定し、その組み合わせによって同一性地位の判定を行う必要があるという。そこで本研究では、アイデンティティ形成に向けての自己投入については、加藤(1983)にならい、現在、過去、未来という3つの時点からの自己投入を検討していくことが望ましいと考えられ、加藤(1983)の尺度を用いることとする。

方法

【対象者・調査時期】：T 県の大学生計324名（男180名，女217名）

【調査時期】：2015年11月中旬～下旬

【調査内容】

①若さの捉え方について：研究1-1で作成された若さの捉え方に関する尺度を用い5件法で回答が求められた。

②自己投入について：加藤(1983)が作成した同一性地位判定尺を用い6件法で回答が求められた。(Table 1-2)

③自尊感情について：Rosenberg(1965)の自尊感情尺度(山本・松井・山城訳，1982)を用い，5件法で回答が求められた。(Table 1-3)

【分析手続き】：若さの捉え方と自己投入および自尊感情との関連を検討するため，若さの捉え方尺度の下位尺度項目得点と，同一性地位判断尺度の各下位尺度項目得点，自尊感情尺度の得点との相関関係を求める。

Table 1-3 自尊感情尺度¹

1	少なくとも人並みには、価値のある人間である。
2	色々なよい素質を持っている。
* 3	敗北者だと思ふことがよくある。
4	物事を人並みには、うまくやれる。
* 5	自分には、自慢できるところがあまりない。
6	自分に対して肯定的である。
7	だいたいにおいて、自分に満足している。
* 8	もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。
* 9	自分は全くダメな人間だと思ふことがある。
* 10	何かについて、自分は役に立たない人間だと思ふ。

*は逆転項目であることを示す。

¹Rosenberg(1965)が作成し、山本・松井・山城訳(1982)したものである。(堀洋道・山本真理子・松井豊編、心理尺度ファイル、p. 98-99, 垣内出版, 1994)

結果

若さの捉え方と自己投入および自尊感情との関連について検討を行うため，相関関係が求められた。分析結果は Table 1-4 に示す。若さの捉え方第1因子「推進力」において，同一性地位判定尺度因子「現在の自己投入」，「将来の自己投入の希求」との間に有意な相関関係が見られた(順に $p<.05$, $p<.01$)。若さの捉え方第3因子「成長の基礎」において，「将来の自己投入の希求」との間に有意な相関関係が見られた($p<.01$)。若さの捉え方第4因子「大過許容」においては「将来の自己投入の希求」，自尊感情との間に有意な相関関係が見られた($p<.01$)。若さの捉え方第5因子「無分別挑戦」と同一性地位判定尺度因子「過去の危機」との間に有意な相関関係が見られた($p<.01$)。なお，若さの捉え方第2因子「若さ卑下」においては有意な相関関係は見られなかった。

Table 1-4 若さの捉え方尺度各因子項目合計得点と同一性地位判断尺度各因子合計得点及び自尊感情得点との相関関係

	「現在の自己投入」	「過去の危機」	「将来の自己投入の希求」	自尊感情
若さの捉え方第1因子： 「推進力」	.123*	.066	.159**	.061
若さの捉え方第2因子： 「若さ卑下」	.037	-.043	-.007	.090
若さの捉え方第3因子： 「成長の基礎」	.043	.089	.138**	.042
若さの捉え方第4因子： 「大過許容」	.034	.081	.110**	.111**
若さの捉え方第5因子： 「無分別挑戦」	.090	.164**	.085	-.001

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

考察

全体に弱い相関関係ではあったものの、若さの捉え方第1因子「推進力」は「現在の自己投入」及び「将来への自己投入の希求」の間に、第3因子「成長の基礎」第4因子「大過許容」は「将来の自己投入の希求」との間に有意な相関関係がみられたことから、若さをポジティブに捉えることはアイデンティティ形成と関連があることが示唆された。特に若さを“自分の限界に果敢に挑む勇気”“どんなことにも取り組む積極性”などの「推進力」と捉えることは現在において自分の目標を成し遂げるために努力していたり、これから一生懸命に打ち込めるものを積極的に探し求めているなど、現実及び将来の態度や行動につながりやすいことが推察される。自尊感情との関連では「大過許容」においてのみ有意な相関関係が示された。「大過許容」の項目内容を見ると“失敗が許されること”“間違いや失敗ができること”であり、若さをやり直しが可能であると捉えることで、自分に肯定的になりやすく自分に自信を持つことができると推察される。

ここまでは、アイデンティティと若さの捉え方に関してのみの検討であったが、若さの自己認知とはどのような関連があるのだろうか。研究2では、若さにおける捉え方および自己認知によるアイデンティティの形成に向けての自己投入及び自尊感情の差について検討していくこととする。

Ⅱ. 若さにおける捉え方及び自己認知による自己投入および自尊感情の差についての検討(研究2)

研究1-2によって若さの捉え方と自己投入および自尊感情との間に関連があることが示された。では、若さの自己認知はアイデンティティ形成のための自己投入及び自尊感情にどのような影響を与えるのだろうか。ここでは、若さの捉え方と若さの自己認知による自己投入及び自尊感情の差について明らかにすることを目的とする。

方法

【対象者】：T県の大学生計324名（男180名、女217名）

【調査時期】：2015年11月中旬～下旬

【調査内容】

①若さの自己認知について：自分が若いと思うかどうかについて、「若いと思う」、「若くないと思う」の2件法で回答が求められた。

②自己投入について：研究1-2と同様

③自尊感情について：研究1-2と同様

【分析手続き】：若さの捉え方および若さの自己認知による自己投入および自尊感情の差について調べるため、若さの捉え方および若さの自己認知を独立変数とし、自己投入および自尊感情を従属変数とする2要因分散分析を行った。なお、若さの捉え方に関しては、各因子項目合計得点を用い、Table 2-1に示す基準に従い、群分けを行った。若さの捉え方における各因子項目合計得点の平均を中心に、平均以上を若さの捉え方各因子高群、平均未満を若さの捉え方各因子低群として、群分けを行った。

Table 2-1 若さの捉え方各因子項目得点による群分けの基準値

群分けの基準値	平均以上(高群)	平均未満(低群)
若さの捉え方		
第1因子：推進力	32.13～	～32.12
第2因子：若さ卑下	20.45～	～20.44
第3因子：成長の基礎	24.87～	～24.86
第4因子：大過許容	18.35～	～18.34
第5因子：無分別挑戦	9.16～	～9.15

結果

1. 若さにおける捉え方の程度および自己認知による「自己投入」の差について

①若さの捉え方の程度および若さの自己認知による

「現在の自己投入」の差について (Table 2-2)

「現在の自己投入」において、成長の基礎の程度の主効果 ($F(1,416)=2.90, p<.10$) が有意傾向にすぎなかったが、「成長の基礎低群」より「成長の基礎高群」のほうが得点が高いことが示された。また、大過許容の程度と若さの自己認知との間には交互作用 ($F(1,416)=4.36, p<.05$) が見られ、「大過許容高群」において、「若くない」より「若い」のほうが得点が高いことが示された。若さの自己認知における大過許容の程度の単純主効果は、有意な結果を得られなかった。

なおその他の捉え方の程度と若さの自己認知による差については、有意な結果を得られなかった。

②若さにおける捉え方の程度および自己認知による「過去の危機」の差について (Table 2-3)

「過去の危機」において、大過許容の程度と若さの自己認知との間に交互作用 ($F(1,416)=3.71, p<.10$) が有意傾向として示され、「若い」において「大過許容低群」より「大過許容高群」のほうが得点が高い傾向にあった。大過許容の程度にお

Table 2-2 若さの捉え方および若さの自己認知による「現在の自己投入」得点の平均 (SD) 及び分散分析の結果

			M (SD)	N	主効果	交互作用	下位検定	
現在の自己投入	推進力高群	若い	15.70 (4.00)	200	n.s.	n.s.		
		若くない	15.20 (4.06)	30				
		計	15.63 (4.00)	230				
	推進力低群	若い	15.01 (3.69)	143				
		若くない	14.45 (4.71)	47				
		計	14.87 (3.96)	190				
	若さ卑下高群	若い	15.48 (3.86)	194	n.s.	n.s.		
		若くない	14.79 (4.56)	38				
		計	15.37 (3.98)	232				
	若さ卑下低群	若い	15.32 (3.92)	149				
		若くない	14.69 (4.41)	39				
		計	15.19 (4.02)	188				
	成長の基礎高群	若い	15.46 (4.12)	207	F(1,416)=2.90†	n.s.		成長の基礎低群<成長の基礎高群
		若くない	15.69 (4.11)	32				
		計	15.49 (4.11)	239				
	成長の基礎低群	若い	15.34 (3.51)	136				
		若くない	14.07 (4.62)	45				
		計	15.02 (3.84)	181				
大過許容高群	若い	15.79 (3.96)	182	n.s.	F(1,416)=4.36*	大過許容高群:若くない<若い		
	若くない	14.03 (4.33)	35					
	計	15.50 (4.07)	217					
大過許容低群	若い	14.99 (3.76)	161					
	若くない	15.33 (4.53)	42					
	計	15.06 (3.92)	203					
無分別挑戦高群	若い	15.53 (4.03)	219	n.s.	n.s.			
	若くない	14.50 (4.22)	37					
	計	15.37 (4.15)	259					
無分別挑戦低群	若い	15.19 (3.62)	124					
	若くない	15.00 (4.22)	37					
	計	15.15 (3.75)	161					
全体(計)	若い	15.41 (3.88)	343					
	若くない	14.74 (4.46)	77					
	計(全体)	15.29 (4.00)	420					

***p<.001,**p<.01,*p<.05,†p<.10

ける若さの自己認知の単純主効果は有意な結果が示されなかった。無分別挑戦の程度と若さの自己認知による差については、捉え方の主効果 (F(1,416)=5.33, p<.05) が見られ、「無分別挑戦低群」より「無分別挑戦高群」のほうが得点が高いことが示された。

③若さにおける捉え方の程度および自己認知による「将来の自己投入の希求」の差について (Table 2-4)

「将来の自己投入の希求」において、推進力の程度と若さの自己認知による差の検討及び、若さ卑下の程度と若さの自己認知による差に関しては、いずれにおいても若さの自己認知の主効果 (順に (F(1,416)=2.98, p<.10); (F(1,416)=3.38, p<.10)) が有意傾向として示され、いずれも「若くない」より「若い」ほうが得点が高い傾向にあった。成長の基礎の程度と若さの自己認知による差の検討では、成長の基礎の程度の主効果 (F(1,416)=4.65, p<.05) が見られ、「成長の基礎低群」より

「成長の基礎高群」のほうが得点が高いことが示された。大過許容の程度と若さの自己認知による差の検討では交互作用 (F(1,416)=3.14, p<.10) が有意傾向として示され、「大過許容高群」において「若くない」より「若い」方が、「若い」において「大過許容低群」より「大過許容高群」の方が得点が高い傾向にあった。無分別挑戦の程度と若さの自己認知による差の検討においても交互作用が (F(1,416)=3.06, p<.10) 有意傾向となり、「無分別挑戦高群」において「若くない」より「若い」のほうが得点が高かった。

2. 若さの捉え方の程度および若さの自己認知による「自尊感情」の差について (Table 2-5)

若さの捉え方「無分別挑戦」を除く全ての若さの捉え方と若さの自己認知による自尊感情の差について若さの自己認知の主効果が有意となり (若さの捉え方因子の順に (F(1,416)=16.73, p<.001); (F(1,416)=17.42, p<.001); (F(1,416)=15.83, p<.001); (F(1,416)=17.39, p<.001)), いずれにおいても「若くない」

Table 2-3 若さの捉え方および若さの自己認知による「過去の危機」の平均 (SD) 及び分散分析の結果

		M (SD)	N	主効果	交互作用	下位検定
過去の危機	推進力高群	若い	16.92 (3.49)	200	n.s.	n.s.
		若くない	16.43 (2.98)	30		
		計	16.86 (3.43)	230		
	推進力低群	若い	16.31 (3.34)	143		
		若くない	17.11 (3.61)	47		
		計	16.51 (3.61)	190		
	若さ卑下高群	若い	16.42 (3.29)	194	n.s.	n.s.
		若くない	16.92 (3.32)	38		
		計	16.50 (3.29)	232		
	若さ卑下低群	若い	16.99 (3.60)	149		
		若くない	16.77 (3.48)	39		
		計	16.95 (3.57)	188		
	成長の基礎高群	若い	17.07 (3.48)	207	n.s.	n.s.
		若くない	17.03 (3.16)	32		
		計	17.06 (3.43)	239		
	成長の基礎低群	若い	16.06 (3.30)	136		
		若くない	16.71 (3.55)	45		
		計	16.22 (3.36)	181		
	大過許容高群	若い	17.14 (3.34)	182	n.s.	F(1,416)=3.71†
		若くない	16.49 (3.11)	35		
計		17.03 (3.31)	217			
大過許容低群	若い	16.14 (3.47)	161			
	若くない	17.14 (3.59)	42			
	計	16.34 (3.51)	203			
若い	大過許容高群	17.14 (3.34)	182			若い:大過許容低群<大過許容高群
	大過許容低群	16.14 (3.47)	161			
	計	16.67 (3.44)	343			
若くない	大過許容高群	16.49 (3.11)	35			
	大過許容低群	17.14 (3.59)	42			
	計	16.84 (3.38)	77			
無分別挑戦高群	若い	17.05 (3.49)	219	F(1,416)=5.33*	n.s.	無分別挑戦低群<無分別挑戦高群
	若くない	17.30 (3.44)	37			
	計	17.08 (3.48)	259			
無分別挑戦低群	若い	16.00 (3.24)	124			
	若くない	16.35 (3.29)	37			
	計	16.08 (3.24)	161			
全体(計)	若い	15.41 (3.88)	343			
	若くない	14.74 (4.46)	77			
	計(全体)	15.29 (4.00)	420			

***p<.001,**p<.01,*p<.05,†p<.10

より「若い」のほうが得点が高いことが示された。また「若さ卑下」ではその程度の主効果が有意傾向として示され「若さ卑下低群」より「若さ卑下高群」のほうが得点が高い傾向にあった。「無分別挑戦」の程度と若さの自己認知の交互作用がみられ下位検定の結果、「無分別挑戦高群」において「若くない」より「若い」ほうが、また「若くない」において「無分別挑戦高群」より「無分別挑戦低群」のほうが得点が高いことが示された。

考察

若さにおける捉え方及び自己認知がアイデンティティ形成に向けての現在、過去、将来の自己投入及び自尊感情とどのように関連しているかについて主な結果を中心に述べる。

まず、若さにおける捉え方及び自己認知がアイデ

ンティティ形成に向けての現在、過去、将来のための自己投入及び自尊感情とどのように関連しているかについてみていく。

一番目に、若さの捉え方「大過許容」の場合有意傾向にすぎなかったが、3つの全ての時点での自己投入、すなわち「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」のそれぞれにおいて若さにおける捉え方と自己認知との間に交互作用が示された。下位検定の結果、「現在の自己投入」及び「将来の自己投入の希求」の場合「大過許容高群」において「若くない」より「若い」ほうが、「過去の危機」及び「将来の自己投入の希求」においては「若い」において「大過許容低群」より「大過許容高群」のほうが、より高い傾向にあった。

ここで「過去の危機」の項目をみると、自分がど

んな人間なのか、何がしたいのかということを実際に迷い考えたことがあるなどの内容が含まれているが、このような悩みや葛藤は、青年自身が自分は若いと考えており、若さとは多少の失敗や間違いは許されるものとして捉えるほど多くなることが示された。また若さを「大過許容」のような捉え方をしている場合においても、自分が若いという自己概念をもっているとき現在や将来のための自己投入が行われやすいことが示唆された。これらを合わせて考えると、まず若いという自己認知とともに、若いからこそたとえ失敗したとしても許されるものであり、若さをやり直しができるものとして捉えるとき、アイデンティティ形成に向けての自己投入が生じやすく、自分は若いという認識を保ち続けることによって主体的に選択することを恐れず、失敗に臆するこ

となく、現在や将来のための積極的な自己投入が行われるのではないかと推察される。

二番目に、若さの捉え方「無分別挑戦」の場合、「過去の危機」及び「将来の自己投入の希求」との関連が示された。「過去の危機」の場合、若さの捉え方の主効果が示され、「無分別挑戦低群」より「無分別挑戦高群」のほうがより高かったが、これについては、自分はどんな人間なのか、何がしたいのかわからないなどの葛藤や迷いといった「過去の危機」の経験が多かった場合、その若さゆえ無謀で無計画な行動をとりやすく、自らの経験から若さを「無分別挑戦」のようなものとして捉えやすくなるのではないかと考えられ、本研究での結果はこのことによるものと解釈される。「将来の自己投入の希求」では若さにおける捉え方と自己認知の交互作用

Table 2-4 若さの捉え方および若さの自己認知による「将来の自己投入の希求」得点の平均 (SD) 及び分散分析の結果

		M (SD)	N	主効果	交互作用	下位検定	
将来の自己投入の希求	推進力高群	若い	16.13 (3.33)	200	F(1,416)=2.98†	n.s.	若くない<若い
		若くない	14.87 (3.73)	30			
		計	15.96 (3.40)	230			
	推進力低群	若い	15.42 (2.82)	143			
		若くない	15.28 (2.88)	47			
		計	15.38 (2.83)	190			
	若さ卑下高群	若い	15.71 (3.12)	194	F(1,416)=3.38†	n.s.	若くない<若い
		若くない	14.97 (3.22)	38			
		計	15.59 (3.14)	232			
	若さ卑下低群	若い	15.99 (3.12)	149			
		若くない	15.26 (3.26)	39			
		計	15.84 (3.20)	188			
	成長の基礎高群	若い	16.19 (3.20)	207	F(1,416)=4.65*	n.s.	成長の基礎低群<成長の基礎高群
		若くない	15.59 (3.36)	32			
		計	16.11 (3.22)	239			
	成長の基礎低群	若い	15.28 (2.98)	136			
		若くない	14.78 (3.11)	45			
		計	15.15 (3.01)	181			
	大過許容高群	若い	16.17 (3.29)	182	F(1,416)=3.30†	F(1,416)=3.14†	大過許容高群:若くない<若い
		若くない	14.74 (2.97)	35			
		計	15.94 (3.28)	217			
大過許容低群	若い	15.45 (2.93)	161				
	若くない	15.43 (3.42)	42				
	計	15.44 (3.03)	203				
若い	大過許容高群	16.17 (3.29)	182			若い:大過許容低群<大過許容高群	
	大過許容低群	15.45 (2.93)	161				
	計	15.83 (3.14)	343				
若くない	大過許容高群	14.74 (2.97)	35				
	大過許容低群	15.43 (3.42)	42				
	計	15.12 (3.22)	77				
無分別挑戦高群	若い	15.99 (3.27)	219	n.s.	F(1,416)=3.06†	無分別挑戦高群:若くない<若い	
	若くない	14.65 (3.45)	37				
	計	15.78 (3.33)	259				
無分別挑戦低群	若い	15.56 (2.89)	124				
	若くない	15.65 (2.92)	37				
	計	15.57 (2.89)	161				
全体(計)	若い	15.83 (3.14)	343				
	若くない	15.12 (3.22)	77				
	計(全体)	15.70 (3.16)	420				

p<.001,p<.01,*p<.05,†p<.10

Table 2-5 若さの捉え方および若さの自己認知による自尊感情得点の平均 (SD) 及び分散分析の結果

		M	(SD)	N	主効果	交互作用	下位検定
自尊感情	推進力高群	若い	30.09 (7.49)	219	F(1,416)=16.73***	n.s.	若くない<若い
		若くない	29.85 (6.18)	124			
		計	29.99 (6.96)	343			
	推進力低群	若い	26.47 (6.93)	40			
		若くない	26.04 (7.56)	37			
		計	26.21 (7.28)	77			
	若さ卑下高群	若い	30.47 (6.82)	219	F(1,416)=17.42***	n.s.	若くない<若い
		若くない	29.36 (7.12)	124			
		計	29.99 (6.96)	343			
	若さ卑下低群	若い	27.24 (7.71)	40			若さ卑下低群<若さ卑下高群
		若くない	25.21 (6.78)	37			
		計	26.21 (7.28)	77			
	成長の基礎高群	若い	30.23 (7.23)	219	F(1,416)=15.83***	n.s.	若くない<若い
		若くない	29.62 (6.54)	124			
		計	29.99 (6.97)	343			
	成長の基礎低群	若い	27.16 (7.13)	40			
		若くない	25.53 (7.38)	37			
		計	26.21 (7.28)	77			
	大過許容高群	若い	30.63 (7.52)	219	F(1,416)=17.39***	n.s.	若くない<若い
		若くない	29.27 (6.22)	124			
		計	29.99 (6.96)	343			
大過許容低群	若い	26.69 (7.48)	40				
	若くない	25.81 (7.17)	37				
	計	26.21 (7.28)	77				
無分別挑戦高群	若い	30.04 (7.13)	219	F(1,416)=17.22***	F(1,416)=5.20**	無分別挑戦高群:若くない<若い	
	若くない	24.33 (6.94)	40				
	計	29.15 (7.39)	259				
無分別挑戦低群	若い	29.90 (6.68)	124	F(1,416)=4.54**			
	若くない	28.24 (7.17)	37				
	計	29.30 (7.16)	420				
若い	無分別挑戦高群	30.04 (7.13)	219			若くない:	
	無分別挑戦低群	29.90 (6.68)	124				
	計	29.99 (6.96)	343				
若くない	無分別挑戦高群	24.33 (6.94)	40			無分別挑戦高群<無分別挑戦低群	
	無分別挑戦低群	28.24 (7.17)	37				
	計	26.21 (7.28)	77				
全体(計)	若い	29.99 (6.96)	343				
	若くない	26.21 (7.28)	77				
	計(全体)	29.30 (7.16)	420				

***p<.001,**p<.01,*p<.05,†p<.10

が有意傾向として示され、「無分別挑戦高群」において「若くない」より「若い」のほうがより高かった。これについて、若さとは無分別に挑戦できると考えるとき、現実において若いという自己概念を持っていることで、無謀なことに思えても自分なら何か意味あることができると思い、そのために一生懸命に打ち込めるものを探そうになるため、「将来の自己投入の希求」につながりやすいと推察される。

これらの結果から、若さの捉え方そのものも、青年がどのような「過去の危機」を経験したのか、また現在どのような自己投入をしているのかということ、若さの自己認知と照らし合わせながら判断されていることが考えられ、若さの捉え方の背景については今後より詳細な検討が必要であろう。

三番目に、自己投入において若さの捉え方の主効果が示された「成長の基礎」、有意傾向であったものの若さの自己認知の主効果が示された「推進力」

「若さ卑下」の結果についてみていく。

若さの捉え方「成長の基礎」の場合、「現在の自己投入」においては有意傾向に過ぎなかったが、「現在の自己投入」「将来の自己投入の希求」のいずれにおいても「成長の基礎高群」が「成長の基礎低群」より高かった。このことから若さを様々なことに挑戦できる“時期”であったり、何かを習得したり、成長したりすることができる“力”または自分の努力次第で変えられる“可能性”であったりするものとして捉えることが、アイデンティティ形成に向けて現在や将来のための活発な自己投入につながりやすいと推察される。それに対して若さの捉え方「推進力」および「若さ卑下」と若さの自己認知による検討では若さの捉え方の主効果は得られず、いずれにおいても「将来の自己投入の希求」においてのみ若さの自己認知の主効果が有意傾向として示され、「若い」のほうが「若くない」より得点がより

高かった。すなわち、若いという自己認知が将来に向けての活発な自己投入につながりやすいことが示唆された。

これらの結果から、一般的な若さに対してどのような捉え方をしているかというよりも、若いという自己認知が自己投入により強く関連していることが考えられ、青年期においてアイデンティティ形成のための自己投入が活発に行われるためには、まず自分が若いという自己認知が先に必要であり、そのような自分をどのように捉えるかが重要であると解釈される。

次に、若さの捉え方と若さの自己認知による自尊感情の差に関してみていくこととする。

「無分別挑戦」を除いた全ての捉え方において主効果は得られず若さの自己認知の主効果が示され、「若くない」より「若い」のほうが得点がより高かった。また有意傾向であったものの、若さの捉え方「若さ卑下」においては主効果が示され、「若さ卑下低群」より「若さ卑下高群」の方が自尊感情がより高かった。このことから自尊感情には若さの自己認知が深く関連しており、若さそのものを卑下するというよりは、若者一般を卑下することで、相対的に自分は成熟していると自分自身を高く評価し、自尊感情を高めている可能性が推察されるが、これについては今後さらなる検討が求められる。

また若さの捉え方「無分別挑戦」と若さの自己認知による自尊感情の差については交互作用が有意となり、「無分別挑戦高群」において「若くない」より「若い」のほうが得点がより高く、「若くない」において「無分別挑戦低群」が「無分別挑戦高群」より得点がより高かった。つまり若さを「無分別挑戦」として捉えた場合、自分自身は若いという自己認知をするほど自尊感情が高くなり、それに対して自分は若くないと認知している場合は「無分別な挑戦」として捉えていないほど自尊感情が高くなることが示された。すなわち青年は若さを無謀なものであると捉えていて、かつ自分が無鉄砲に行動できないとき自尊感情が低下すること、また自分を若くないと認知しているとき、若さを無謀なものであると捉えることは、自尊感情を低下させることが示唆された。このことから、青年の場合無分別な挑戦は若いからできるという考え方が背景にあると伺われ、青年は後先考えず行動することに若さの価値をおいていることが推察される。人は、成長するにしたがっ

て熟考し、無謀な行動をしなくなるといえる。青年期における無謀ともいえる行動は、青年にとって重要なものとして位置づけられているのではないだろうか。

まとめと今後の課題

青年期は迷い、悩みながら将来を決定していく時期であり、青年期の発達主題はアイデンティティの形成である（大野，2010）。若さとは、年齢や見た目などの外的側面と、やる気や未熟さといった内的側面から捉えることができるだろう。青年が自己の若さをどのように認知しているのかによって、自己形成のための主体的な選択や積極的関与は異なってくるのではないだろうか。日本における若者の求職活動を含めた積極的社会参加の阻害要因の1つとして自尊感情の低さが考えられ、このような自尊感情の低さによりアイデンティティ形成のための自己投入も円滑に行なわれることが難しいのではないかと予想される。そこで「若さのポジティブな捉え方及び若いという自己認知はアイデンティティに向けての自己形成及び自尊感情に正の影響を及ぼすであろう」という仮説のもと検討を行った。主な結果は以下の通りである。

本研究の結果から、まず若さのポジティブな捉え方「推進力」「成長の基礎」がアイデンティティ形成に向けての自己投入「将来の自己投入の希求」において有意な正の相関関係が得られ、さらに分散分析の結果（Table 2-3, 2-4, 2-5）から、若いという自己認知がアイデンティティ形成や自尊感情にポジティブな影響を与えることが示唆された。このことから本研究の仮説は概ね支持されたといえよう。また「現在の自己投入」及び「将来の自己投入の希求」において若さの自己認知と若さの捉え方「大過許容」による交互作用がみられ、青年が自分を若いと認知し、多少の過ちや失敗は許されると思っていることが、現在や将来に向けての積極的な自己投入ができることが示唆された。若さは許されるものである、と捉えるということは、失敗を恐れたり、怯んだりせず、何事にも勇敢に挑戦できることが予想され、若さをこのように捉えることにより、現在や将来において、どんなことにも挑戦していこうという積極的な態度につながりやすいと推察される。一方、アイデンティティ形成のための自己投入において若さの捉え方の主効果はほとんど見られなかったことから、若さ一般についてどのように捉えるかというよ

りも、自己の若さをどのように認知しているのかの
ほうが、アイデンティティ形成においてより重要で
あることが示唆された。今後は、青年における若さ
の捉え方の背景や、自分の若さをなぜそのように捉
えているかという理由を調べることにより、なぜ積
極的に自己投入ができないのかなど、青年の心の動
きのメカニズムをより明らかにでき、社会的不適応
を示す青年期問題の解決のためのより具体的な手が
かりが得られると考えられる。

本研究では大学生のみが調査対象者であったが、
青年期における若さということを見ると、大学生
を含めた幅広い青年層を対象に調べることによって、
若さの捉え方や若さについての自己認知が青年期の
アイデンティティ形成にどのように関連しているの
かについて、より明らかにすることができるであろ
う。また、自分は若いと認知することが自己形成や
自尊感情にポジティブに働くという結果が得られた
が、青年期以降においても同様ではないだろうか。
これを明らかにする為には、成人期、中年期、老人
期においても、若さの自己認知やその理由が自尊感
情にどのような影響を及ぼすのかについて検討する
ことが必要だろう。長寿命化・少子高齢化が進む今
日、いつまでも若い気持ちを持ち続けることは、歳
を重ねても意欲的でいきいきとした生活につながる
のではないだろうか。

これらのことが今後の課題として解決が望まれる。

参考文献

- 荒井 真太郎 2005 「自己投入」について—自尊
感情、発達段階との関連— 関西国際大学研究紀
要 第6号 111-122
- 遠藤 由美 1992 自己認知と自己評価の関係—
重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコア
からの検討— 教育心理学研究 第40巻 第2号
157-163
- 藤原 梢・菅原 正和 2010 理想—現実自己の
齟齬と自己受容の心理学 岩手大学教育学部附属
教育実践総合センター研究紀要 第9号 125-140
- 原田 宗忠 2008 青年期における自尊感情の揺
れと自己概念との関係 教育心理学研究 第56
巻 第3号 330-340
- 井上 祥治 2008 自尊感情と自己概念の明確性
および時間的安定性 岡山大学教育実践総合セン
ター紀要 第8巻 73-80

伊藤 正哉・小玉 正博 大学生の主体的な自己形
成を支える自尊感情の検討—本来感、自尊感情な
らびにその随伴性に注目して— 第54巻 第2号
222-232

加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相と
その構造 教育心理学研究 第31巻 第4号
292-302

榎場 真知子 2007 青年後期におけるアイデン
ティティの発達過程及びそれに関する要因につ
いて—過去と現在における「危機」「自己投入」の
様相、及びアイデンティティ・ステータスの移行を
中心として— 青年心理学研究 第19号 51-68

大野 久 編著 2010 エピソードでつかむ青年
心理学 ミネルヴァ書房

Rosenberg M. 1965 Society and adolescent self-
image. New Jersey: Princeton University Press.

佐藤 眞一・下仲 順子・中里 克治・河合 千恵
子 1997 年齢アイデンティティのコーホート
差、性差、およびその規定要因：生涯発達の視点
から 発達心理学研究 第8巻 第2号 88-97

下仲 順子 1980 青年群との対比における老人
の自己概念—世代差、性差を中心として— 教育
心理学研究 第28巻 第4号 303-309

砂田 良一 1979 自己像との関係からみた自我
同一性 教育心理学研究 第27巻 第3号 216-
220

高井 範子 2007 青年期及び成人期における忍
耐力と失敗懸念に関する研究 太成学院大学紀要
第9巻 31-40

谷 冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の
構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—
教育心理学研究 第49巻 第3号 265-273

山田 剛史 2004 現代大学生における自己形成
とアイデンティティ—日常的活動とその文脈の観
点から— 教育心理学研究 第52巻 第4号
402-413

謝辞

本研究を実施するにあたり、調査にご協力してく
ださいました富山大学の先生方、また多くの学生の
皆様に、深く感謝申し上げます。

(2017年5月22日受付)

(2017年7月13日受理)